

2024年度 ドコモ市民活動団体助成事業 活動成果報告書				2025/9/30		
団体名		ガールスカウト石川県第7団		活動タイトル	「わたしの体は、わたしのもの」少女の自己決定能力を育むプログラム	
望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）					■活動風景	
●地域の望ましい社会状況(ビジョン)		①男女ともに誰もが自分の体と性を肯定的、科学的に捉え、相手を尊重することができる社会 ②性別や障害の有無による差別や偏見、強制、暴力、不平等がない社会 ③自分自身のことは自分で決め、自分で選ぶことがあたりまえにできる社会 ④非常時においても自分の体・性・プライバシーが守られる社会 ⑤性の違いに起因する不平等に対し、声を上げることができる社会			3月30日思春期ワークショップ	
●団体の社会的役割(ミッション)		ガールスカウト石川県第7団は、幼児・小学生・中学生・高校生・成人を対象に、多様なプログラムを通して少女・女性の行動力、思考力、リーダーシップ能力を育む社会教育団体である。ノンフォーマル教育を通してさまざまな少女・女性が交わり、学び合い、相互に成長することで、次世代の地域社会における変化の担い手を育成することを目指している。				
●団体の活動基盤		●望ましい人的資源：様々な年代の成人会員が、研修等で研鑽を積み、少女を取り巻く環境の変化を理解し、少女たちが主体的に活動に取り組めるように支援をする働きかけができる。少女たちがリーダーシップを相互に高めることができる人数が必要。 ●望ましい物的資源：取り組む課題を理解するためにわかりやすい資料を自分たちで十分に準備ができるパソコンや印刷機器、インターネット環境。 ●望ましい活動資金：事業を行う際に安全な会場を借りるための資金、課題解決を導くためにリーダー以外に示唆を与えてくれる講師を依頼し、派遣に応じていただくための資金、少女たちが安心して活動するために会場移動時やフィールドワーク時の交通費、成果をまとめるための紙資源や印刷費用、発表するための会場費用があると望ましい。 ●望ましい情報：課題解決に必要なと思われる分野の専門家の存在の情報。専門家の方には、課題解決に必要なプロセスに関してのわかりやすい情報と途中経過の報告に対して的確なアドバイスと寄り添いと励ましを期待する。				
■活動報告			■1年間の目標に対する達成状況(まとめ)			
本事業は、思春期の子どもたちおよびその保護者・関係者を対象に、包括性教育の学びを提供することを目的に実施した。 思春期の少女向け講座、オンラインを使った大人向け講座、男の子の二次性徴を学ぶ講座、生理について学べるワークショップを行い、参加者が性について正しく理解し、安心して学べる環境を整えることをめざした。 実施内容 1. 思春期の少女を対象とした講座 心と身体の変化、月経の仕組み、セルフケアについて学習した。聴講者は講師の講義方法を学習した。 2. 思春期の子どもに関わる大人への講座 子どもとの性に関する対話の方法、支援のあり方を考えた。 3. 男の子の二次性徴を学ぶ講座 身体の変化、感情のコントロール、性に関する責任について理解を深めた。 4. 「生理について学べる、謎解きワークショップ」 生理と生理用品のしくみを学んだ後、災害時の「水が使えない」状況を想定し、生理用品の必要数を親子で考えた。			1. 思春期の少女を対象とした講座(少女の体と心の変化を学ぶ会（大人）) ①開催 1回実施 ②目標アウトカム「講座内容の満足度」：参加者の57%が「満足した」以上 2.思春期の子どもに関わる大人への講座(女の子の思春期ワークショップ) ①開催 1回実施 ②目標アウトカム「学んだことをほかの人に伝えたい」：参加者の中高生2名が回答 3.男の子の二次性徴を学ぶ講座(男の子の体の変化（二次性徴）を学ぶ会) ①開催 1回実施 ②目標アウトカム「講座内容の満足度」：参加者の35%が「満足した」以上 4.「生理について学べる、謎解きワークショップ」生理を学ぶワークショップ ①開催 1回実施 ②目標アウトカム「思春期ワークショップ参加の中高生の運営参加」：参加者0名 5.活動基盤の強化 ①研修会参加、ワークショップ運営参加 ②自発的に活動できる支援スタッフ：8名			
■事業を通じて得られたノウハウ			■望ましい社会状況を達成するための課題			
◆開催場所の工夫 講座は青少年交流センターで開催したが、当日は青少年の出入りが少なく、参加者の確保には至らなかった。その経験を踏まえ、ワークショップは親子の参加を意識し、地域の図書館を会場に設定。結果として、当日参加者を得ることができた。			本事業を始めたきっかけは、能登半島地震の避難所に関する新聞報道でした。被災した女性たちは、避難所で性被害がいへの不安を抱えながらも、女性という立場から介護や食事の世話を担わざるを得ませんでした。私たちは、災害時にこのような不平等な状況を生まないために、社会のジェンダー意識を変えていく必要があると考えています。そのために、子どもたちに人間の体の仕組みを科学的に正しく伝え、「自分を大切にする」コミュニケーションのあり方や、「境界線と同意」の考え方を基に活動を続けています。 私たちが目指すより良い社会は、義務教育の中で包括性教育があたり前に学べることです。活動を通じて、同じ志を持つ方々とも出会いました。金沢市役所ダイバーシティ人権政策課ではこの夏、オンラインで包括性教育講座が開催され、また、石川県立看護大学の楠作先生を中心に、県内の医療系大学生による「ユースクリニック」の取り組みも始まりました。 私たちはこれからも力を合わせ、地道に活動を続けていきたいと思います。			
◆開催方法と広報戦略 ・全事業において、チラシ配布・SNS投稿・関係団体との連携を通じて広報を実施。 ・同じ目的を持つ団体との出会いにより、SNSでの広報支援を受けることができた。 ・事前募集フォームの設置に加え、当日会場での声かけによって参加を促進。			■活動成果のアピールポイント（自由記入）			
◆成果と今後の展望 ・ワークショップには9組18名が参加し、親子で性について学ぶ場を実現。 ・包括性教育を知っている人が少ない地域においても、関心を持って参加する人々が存在することを確認。 ・講師からの提案により、対象年齢を小学生まで広げる可能性が見え、今後の展開に向けたヒントとなった。			この1年間の活動を通じて			
			当団体は包括性教育を広める活動をする支援者8名			
			を達成しました。			
			■受益者の具体的な変化（自由記入）			
			●中学3年生から「思春期では気持ちが不安定になると分かったので友達などと認め合っていくことも大切だと考えました。」と振り返りをいただいた。 ●大人の研修会では参加者の57%で「満足した」以上のアンケート結果だった			